

小山実稚恵のピアノニズム

大阪リサイタルシリーズ

2023年テーマ「^{うた}心の詩」

ブラームス: 3つの間奏曲 第1番 作品117-1 変ホ長調

// 第2番 作品117-2 変ロ短調

6つの小品 第2番「間奏曲」 作品118-2

ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ 第31番 変イ長調 作品110

シューベルト: ピアノ・ソナタ 第21番 変ロ長調 D 960



2023 4/23 [日]

14:00開演 (13:30開場)

住友生命いずみホール

大阪市中央区城見1-4-70

S席/5,000円 A席/4,500円

大阪新音会員 S席/4,500円 A席/4,200円

(全席指定)

※曲目・曲順は変更になる場合があります。予めご了承ください。

※未就学児童は、ご入場いただけません。

●チケット販売所

大阪新音 TEL 06-6926-4888
(平日11:00~17:00、土・日・祝休)

住友生命いずみホール
TEL 06-6944-1188

チケットぴあ <https://t.pia.jp/> (Pコード: 226-546)

ローソンチケット <https://l-tike.com/> (Lコード: 52978)

e+(イープラス) <https://eplus.jp/>

●主催 (お問い合わせ先)

 **大阪新音**

大阪市北区西天満4-6-14 イーデザインビル201 (〒530-0047)

TEL 06-6926-4888 (平日11:00~17:00、土・日・祝休)

●協賛

住友生命いずみホール

(一般財団法人 住友生命福祉文化財団)

Koyama Michie

大阪新音は、小山実稚恵さんによる12年間24回にわたる『ピアノ・ロマンの旅』シリーズ(2006~17年)、続いて19年から『ベートーヴェン、そして…』シリーズを主催公演してきました。「そして…」は22年6月で区切りをつけましたが、それとともに、多くの皆さまから「来年からどうなるの?」「小山さんの、いずみホールでのリサイタルをずっと続けてほしい」といった問い合わせ・要望が相次ぎました。この「小山ファン」、「ピアノ音楽ファン」の熱い想いを小山さんに伝え、23年以降も大阪で演奏会を定期開催していただくことになりました。しかも、小山さんが自らのピアノ音楽の解釈・演奏技法などを、テーマを立てながら披露していくという、大阪オリジナルのシリーズ企画です。今後、大阪新音会員やファンの皆さんの希望も参考にしながら、毎回の内容を構成していただきます。第1回となる今回のテーマは「心の詩」です。

大阪シリーズのプログラムは

「私が一生弾き続けたい曲」で…

インタビュー

小山 実稚恵さん



© Tomoko Hidaki

ともに歩んでいきたい

先の「ベートーヴェン、そして…」シリーズは、途中、予想もなかったコロナ禍に見舞われ、演奏会を延期せざるをえなくなるなど、変則的になってしまいました。

「私は、「コロナ禍は人間への警鐘ではないかと思っています。この世には人間の力が及ばないことがたくさんあります。人間が気がつかないうちに、自然に対して、また、生き方において傲慢しやうまんになっていくようなことへの警鐘ではないかと…」
「コロナ禍にベートーヴェンの『生涯250年』が重なったことは、『苦悩を乗り越えて希望をつかみ取れ』というベートーヴェンからのメッセージのように思えてしかたないのですね」

大阪では「そして…」シリーズが2022年6月にファイナルとなりましたが、小山さんをお願いして、23年以降も引き続き、リサイタルをシリーズ開催していただくことになりました。



© ND CHOW

「ありがとうございます。皆さまからご要望をいただいて大阪でリサイタルを続けさせていただけることが、たいへん嬉しいです。新シリーズの総合タイトルを『小山実稚恵のピアノム』としていただいていますので、私が今、ピアニストとして何を感じ、何を考えているかを、聴衆の方々に心を聞いて伝えていきたいと思っています」

「たとえば12年間24回にわたった『ピアノ・ロマンの旅』シリーズでは、演奏会でほとんど弾いたことがない作品、興味をもった曲なども加えてプログラムを構成しました。それらを演奏していくうちに、私自身

が『一生弾き続けたいと思う曲』が絞られていきました。大阪シリーズは、そうした『人生をともに歩んでいきたい作品』を軸にプログラムを組んでいくことを考えています。ですので、演奏曲は『ピアノ・ロマンの旅』などで挙げたものと重なることもあります。しかし『音楽は生きもの』です。私の人生の歩みとともに、演奏も変わるのです。そういうことをお聴きいただければと思います」

今、心に強く沁みている曲

新シリーズ、「小山実稚恵のピアノム」第1回のサブテーマは「心の詩」です。これにはどんな思いを込めていらっしゃるのでしょうか。併せて、プログラムの選曲についてもお話しください。

「うーん。なんて言うのでしょうか、第1回のプログラムは、私が今一番弾きたい曲を選んだ結果です。「コロナ禍の影響もあるかと思いますが、いずれの曲も、これまでの自分が思ってもみなかったほど、強く心に沁みている曲なのです」

「リサイタルに寄せる私の「ロメント」(4面参照)で『ブームスの小

品、ベートーヴェンのソナタ第31番、シューベルトのソナタ第21番はいずれも作曲家最晩年の作品です』と書きましたが、とくに意図して最晩年の作品を並べたのではありません。でも、晩年ならではの『心の詩』が綴られている。今の心情を、皆さまにぜひ聴いていただきたい選曲しました」

プログラムの中でも、シューベルトのソナタ第21番にはとくに思い入れをされているようで…

「コロナの出口が見えていない頃は、ベートーヴェンのソナタ31番にもすごく心を揺さぶられていました。でも今は、コロナとの共存意識からでしょうか、シューベルトのソナタ第21番に、どうしようもない美しさを感じるのです。こんなに素晴らしい作品はありません。やるせないほど、私の心に沁みています」

演奏して幸せを感じるホール

「最後にもう一度、大阪のいずみホールでリサイタルを続けさせていただくのは嬉しいということを申し上げます。と言いますのも、私たちピアニストは自分の楽器(ピアノ)を持ち歩くことができないので、会場のピアノと音響に、とくに関心をもっています。それぞれが良いということだけでなく、響き合っていることがとても重要だと思つのです。そういう面でも大阪のいずみホールはすばらしく、大型のフルコンサートピアノと会場の相性が抜群です。私も弾いていて幸せを感じます」

「また、大阪では聴きに来てくださる皆さまが、あたくまで素敵です。演奏の合間に、そっと客席を見たく、お名前は分からないけれど、いつも来ていただいている方のお顔がたたくさん見えます。皆さまに支えられて演奏を続けさせていただいていることを実感します」

(取材・記事 大阪新音)

小山 実稚恵 (こやま・みちえ)

圧倒的存在感をもつ日本を代表するピアニスト。チャイコフスキー、ショパンの2大国際コンクール入賞以来、常に第一線で活躍し続けています。内外の主要オーケストラや指揮者からの信頼も厚く、数多くの演奏会でソリストに指名されています。2016年度 芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した『12年間・24回リサイタルシリーズ』(06~17年)や『ベートーヴェン、そして…』(19~21年)が、その演奏と企画性で高く評価されました。

22年からサントリーホール・シリーズ、第1シーズン Concerto《以心伝心》を25年まで開催。また、ショパン、チャイコフスキー、ロン＝ティボー、ミュンヘンなど国際音楽コンクールの審査員を務めています。東日本大震災以降は、各地で被災地活動にも情熱を注いでいます。CDはソニーと専属契約を結び32枚をリリース。著書に『点と魂』、平野昭氏との共著『ベートーヴェンとピアノ』があります。17年度紫綬褒章を受章。

コロナ禍が始まって3年。

2020年のベートーヴェン生誕250年の年に、悔しくも始まった人間とコロナの闘いは、いつ終止符が打たれるのでしょうか。大阪での新リサイタル・シリーズ開催の2023年の春こそは…という気持ちで、今いっぱいです。

自然災害やコロナのように、私達が受け身でしか処することのできない災いもあれば、人間が自ら起こす災いもある。長い歴史の中では、災いは形を変えて繰り返し起こり続けますが、人間は必ずそれらを乗り越えて生きてゆく、世界中の人々はそう思っているはずだ。

「コロナは何故ベートーヴェン生誕250年という年に重なったのだろう」これも、やはり運命なのかもしれません。何があっても自らの力で希望に向かって歩むベートーヴェンの音楽を聴いていると、そう思わずにはいられないのです。そんな時を過ごしているからでしょうか、今、自分の心を見つめる時間が増えている気がします。

今回のコンサート「心の詩」で選曲した、ブラームスの小品、ベートーヴェンのソナタ第31番、シューベルトのソナタ第21番は、いずれも作曲家最晩年の作品です。

ブラームスやシューベルトの静かな嘆き。そして痛みに寄り添いながらそつといたわってくれる優しさ。ベートーヴェンの深い愛。嘆きの後に未来に向かって気持ち構築し、希望へと前進していく勇氣…

3人の作曲家が心の奥深くを見つめ、「心の詩」を歌う。やさしさと芯の強さ。今だから、私は、どうしてもこのプログラムを演奏したいと思うのです。

小山 実穂恵

プログラム・メモ

▼ブラームス 3つの間奏曲 作品117より

第1番 変ホ長調／第2番 変ロ短調

▼ブラームス 6つの小品 作品118より

第2番 間奏曲 イ長調

若い頃は雄大で気力あふれる作品を産みだしていたブラームス(1833〜97)ですが、晩年には創作力の衰えを悟つてか、ほとんど小品の作曲に専念します。

「3つの間奏曲」、「6つの小品」ともに、そ

うした時期(1892)の作品です。しかし、やはりブラーム。小品といえども気品と詩情が満ち、個性ゆたかです。

3つの間奏曲の第1番は親しみをもった美しさの特徴 同第2番ではアルペジオの中に美しい旋律が浮かび上がります。

6つの小品は、全体として哀愁に満ちた旋律が心に深く残りますが、中でも第2番は技巧的であるにもかかわらず簡素な印象で、親しみやすい曲調です。この作品の中でも単独で多く演奏されます。

▼ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第31番

変イ長調 作品110

ベートーヴェン(1770〜1827)が、没する5年前の1822年に完成した作品です。叙情感があふれていますが、内面性も強い曲です。

この時期、ベートーヴェンにはいろいろな病気症状が現れ、また身辺のごたごたもあって心身ともに不調でした。しかし、一時の弱気を克服して徐々に創作意欲を取り戻し、ベートーヴェン最後の3曲のピアノ・ソナタ(第30番〜第32番)の創作に至ったのです。

第31番は3楽章から成り、第1楽章は主題がとても美しく、第2楽章はアレグロモルト(「たいへん速く」の意)の楽章ですが、全体的に不気味な雰囲気が出ています。第3楽章はひじょうに斬新な構成と内容です。序奏を経て「嘆きの歌」が静かに美しく奏でられます。「嘆きの歌」はフーガと交代し、最後は希望に満ちあふれるクライマックスが形成されていきます。演奏時間18〜20分。

▼シューベルト ピアノ・ソナタ第21番

変ロ長調 D960

シューベルト(1797〜1828)はこの作品完成の2カ月後に世を去りました。文字どおり生涯最後のピアノ・ソナタです。死期が近いことはシューベルトも承知していたでしょう。しかし作品には絶望感や悲壮感がまったく無く、むしろ悟りの境地を表すように澄んだ、えも言われぬ美しい音楽でつづられています。

第21番は4楽章構成です。第1楽章は、まるでシューベルトが死を受け入れるに至った気持ちを穏やかに延々と語っているようです。第2楽章は緩徐楽章ですが、ここでもシューベルトの心情が穏やかに語られます。第3楽章でようやく明るさを垣間見せ、第4楽章に至って最後に明るい光が射すように締めくくられます。演奏時間は約40分を要するのですが、その半分を第1楽章が占める、本当に長大かつ美しすぎるソナタです。

(マ)